

---

# 咲きほこる華は(短編)

やがわいなほ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

咲きほこる華は（短編）

### 【Nコード】

N05120

### 【作者名】

やがわいなほ

### 【あらすじ】

とある国の名君と誉れ高き王・鳳翔と、後宮随一と評判の美姫・瑞祥。

それなりに仲良くしていたはずのふたりでしたが、ある日政務中に届いた彼女からの文が巻き起こした事態とは？

微糖どころか無糖です。

朱 瑞祥は、誰もが認める美女である。

五〇〇人の美女が集う後宮において、随一の美姫と言え、それは瑞祥に他ならない。

豊かな黒髪は宵闇にも似た輝きを持ち、真白の肌はすべらかで艶やかだ。切れ長の瞳は夜に星が輝くかのような潤みを見せ、そつと目を伏せれば睫が陰をつくる。唇はふつくらとくちづけを待つようにも見え、首は細くたおやかで。

華美ではないが品良く落ち着きがあり、ところどころで細工を凝らしている衣に覆われた肢体は、細いだけではなく優美な曲線を描いている。

ひとにより好む好まざるはあれども、今上陛下の後宮においてもっとも美しい者を訊かれたとき、あがる名——それが、瑞祥である。

今上陛下は名を雲 鳳翔という。早くに父王を亡くし、齡二四にして治世をなす、若き名君と名高きお方だ。

このまま政を為してゆけば、いずれ歴史に名を残す賢王となられるだろうと言われている。

武芸に秀で、眉目秀麗。天は二物どころか溢れんばかりの才を与えたと、民が噂をするほど。

色に溺れることのない陛下が寵愛するのであれば、それは美姫と名高い瑞祥姫に違いない——そう予想された、二人の出会い。

「——まったくもって俺の好みではないな」

「——あら奇遇でございますね。陛下も私の好みに掠りも致しませんわ」

そんな会話で、幕を開けた。

欠片たりとも嘘偽りのない、本音極まりない幕開けだった。

その後のふたりはと言えば、顔を合わせる度に前述のようないっそ小気味の良い掛け合いを始めるものの、それなりに仲睦まじく時を過ごしているかのように見えた。

……そう、見えたの、だが。

ある日の政務中、鳳翔は火急との文を受け取った。差出人は、後宮に住まい鳳翔の寵愛を一身に受けていると噂の瑞祥。

この国でも大家である朱家の娘でもある瑞祥は政務の重要性を熟知しており、政を滞らせるような真似はしたことがない。また、するべきではないと踏まえている。

その瑞祥が送ってきた文。

政務中に文を送ることを詫び、それでも急ぎ内密の話があるので、後宮へ渡ってほしい。それも疾く、との懇願が記された文は、確かに流麗な瑞祥の手跡である。

「……至急決裁が必要な懸案はあるか？」

唯事ではない。そう読み取った鳳翔は、室内に控えていた侍従に問いかけた。

「急ぎの懸案はございません。あとは後日ご確認頂きますれば問題ないかと」

侍従の返答に、鳳翔はひとつうなづく。

「後宮へ先触れを出せ。今から瑞祥のもとへと渡る」

瑞祥は、後宮の入口近い室で待っていた。

扇を手にもっているものの、それで憂いに満ちた表情を隠すこともせず、落ち着かない様子で立ち尽くしていた。

「瑞祥」

「陛下——！」

鳳翔が入室したことにも気づかない様子で悄然としていた彼女に声をかけると、弾かれた様に顔を上げ、その面に厳しい色をにじませる。

「いかがした、瑞祥。そなたがあのような文を寄越すとは」

「申し訳ございません、陛下。お咎めは如何様にもお受けいたします。ですが、急ぎお話ししなければならぬことがございますの」

「そう思つてやつてきた。何事だ？」

促す鳳翔に、瑞祥はともに室に入ってきた侍従に目をやる。

入口にほど近いとはいえ、それでも後宮の一角に足を踏み入れることが出来る男は、鳳翔の傍仕えである彼のみ。もちろん、鳳翔の信頼も篤い。

「このものならばかまわぬ。申してみよ」

「かしこまりました」

首肯した瑞祥はひたと鳳翔を見据える。

「――身籠りましたの」

鳳翔と侍従が目を瞠る。

そう告げた、彼女の瞳に宿る意思は――、

「――あれだけ我慢しろと言いましたのに何しでかして下さったんですの貴方は！？ おかげでこれまで綿密に立ててきた計画がすべて水の泡ですわ！ 貴方のその頭は立派な冠を置いておくだけの台ですの！？ 盛りのついた動物でもあるまいし、少しは分別というものを持ちなさいませこのスカタン――！！」

紛れもない、怒りであつた。

恐れ多くも今上陛下を、侍従の前で怒鳴りつけてもその怒りはまだまだやまない。

『——まったくもって俺の好みではないな』

『——あら奇遇でございますわね。陛下も私の好みに掠りも致しませんわ』

『俺はそなたのようなあからさまに美を誇る女ではなく、野にひっそりと咲く花のような、控えめで可愛らしい女が好きだ』

『わたくしも陛下のように我の強い殿方ではなく、寡黙でやさしく見守ってくださるような方を好ましいと思います』

『……それが本音であれば、後宮一の美姫と名高いそなたを寵愛する振りで、七面倒くさい後宮巡りをしなくても良いのではないだろうか』

『……わたくしも、うるさい実家からの目指せ寵妃！との騒音に煩わされなくて済むのではないかと思います』

『——うむ、それでは』

『——協定を結ぶと、致しましょうか』

「わたくしは言いましたわよね？ 陛下がわたくしの可愛い可愛いひっそりと野に咲く花のような控えめな侍女——鈴來を見初めたときに！ いずれ鈴來を妃として立てるにしても、今はまだ時期尚早。後ろ盾のないあの子では、謀略に巻き込まれる可能性が高い、と。ゆえにしばらくは辛抱くださいませと！ しかと申し上げましたわよね！？」

「う、うむ、確かに言われた」

激怒する美女に押され、国でいちばん権力を持つ男が視線をうろつかせる。侍従に目で助けを求めたが、頼りになるはずの片腕は困惑をあらわにし、動こうとしない。

情けなくもうろたえる褒章を手にした扇で額を突き、正面からね

めつけた。

「それなのにどうして鈴來が身籠るなんて事態が起こってしまったのでしょうか陛下。陛下が朱家の勢力をこれ以上伸ばしたくないと仰られたからこそ、鈴來の後見を務められる家を探し、手を回しているところでございましたのよ!？　このまま鈴來と子の存在が明らかになってしまえば、守るもののいないまま謀殺されてしまう可能性もあるのに!」

「俺の女だ、俺が守るに決まっているだろう!」

「お黙りなさい考えなし!!」

格好良く決めた今上陛下の科白を一蹴。

「後宮というところを甘く見ないことです。わたくしがいくら庇っても、四六時中ともにいることは出来ません。後宮という場所で、過去どれほど凄惨な事件が起こってきたのかは、陛下もご存知でしょう。鈴來を、そんな目に合わせたいのですか貴方は!？」

思慮を巡らせ侍女を思いやる彼女は、鳳翔よりも数段男前だった。無言でうむうむとうなずく侍従は、今上陛下よりも後宮という女の園の恐ろしさを知っているようだ。

「――鈴來は、朱家の娘と致しましょう。父も陛下の第一子が生まれるとわかれば――そしてそれをわたくしが認めているとすれば、了承せざるを得ない。わたくしが認めなければ、鈴來は子とともに葬られる可能性もありますが、鈴來を害すことをわたくしが許さないとするれば、諦めるでしょう。それくらいの分別はあるでしょうか」

額をいまだ突いていた扇を、今度は顎下にやる。喉を軽く突いただけ、それがまるで鋭い刃のように思えるのは、瑞祥が醸し出す気概のためだろう。

「あと三月もすれば、鈴來の腹も目立つようになります。それまでに、鈴來を確固たる地位につけるには、それがもっとも確実な手段でしょう。――何か、異論はございますか?」

「――ありま、せん」

苛烈極まりない意思を見せた烈女に、名君と名高かったはずの男は全面降伏せざるを得なかった。

「……ところで瑞祥。先程から大きな声で鈴來のことを話していたが、ここも後宮内であることに違いない。鈴來の身に大事なのか？」

「氣を回すのが遅うございます陛下。陛下がいらっしゃるまで、そしていらっしゃってからと氣配を読んでおりました。わたくしにも陛下にも侍従の方にも気づかれずに近寄れるものがあるとしたら陛下直属の影くらいです。問題はございません」

「……はい、申し訳ありませんでした。以後精進します……」

後宮で頂点を保つには、美しいだけではいけませんのよ陛下。

華のように笑む美姫に、鳳翔はがっくりとうなだれ、侍従は感嘆を視線に乗せた。



**(後書き)**

あくまでも中華風。本格中華は料理できません。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0512o/>

---

咲きほこる華は(短編)

2010年10月11日04時29分発行